

書簡 大杉栄宛

(一九一六年七月一五日 一信)

伊藤野枝

青空文庫

宛先 東京市麴町区三番町六四 第一福四萬館

発信地 大阪市北区上福島

昨日はとうたうはがきを書く事も出来ませんで失礼して仕舞ひ
ました。何卒あしからずおゆるし下さい。

停車場に和氣わけ（律次郎）さんが思ひがけなく見えてゐましたの
にびつくりしました。あなたが電報を打つて下さつたのですつて
ね。午後から社に伺ふ約束をして直ぐこちらにまゐりました。叔
父（代準介）は午後から旅行するのだと云つて、可なり混雑して

ある処でした。もう一と足で後れて仕舞ふ処でした。午後から社にゆきましたら、菊池氏は小説執筆中で休んでゐました。しばらく暫く和気さんとお話して心齋橋しんさいばしまで一緒に行きました。

叔父は三時にたつと云つてゐたのですけれども九時まで延ばしていろ／＼お話をしました。何か云はうと思ひますけれども、何を云つても駄目なのでいやになつて仕舞ひました。叔父はアメリカに直ぐに行けと云ふのです。そして社会主義なんか止めて学者になれと云ふのです。とにかく二十日ばかり留守にするからそれ迄あると云ひますから、ある事にはしましたが、叔母が何にも分らないくせに、のべつにぐず／＼云ふのを黙つて聞いてゐるのがいやで仕方がありません。要するにあなたと關係をたてと云ふの

ですけれども、それをはつきり云はないのです。

もうあなたのそばを離れて今日で三日目ですね。何だか長いやうな気がします。東京駅では何んだかひどく急がされたのと、不意に多勢の中にまぎれたので、何だか気持が悪くてどきどきして、本当にいやになつて仕舞ひました。鶴見あたりを走つてゐる時分にやうやく落ちつきますと同時に、本当に、あなたのそばからだん／＼に遠ざかつてゆくのだと云ふ意識がはつきりして来て、すっかり心細くなつて仕舞ひました。沼津までは随分込んでゐましたので体をまげる事も窮屈でしたけれど、沼津でボーイが席を代へてくれましたので少し眠りました。でも、天龍川を渡る時分はいい月で、ほんとにいい景色でした。いろいろな事を考へながら

眺めてゐました。労働運動の哲学を持つてゐた事は本当に嬉しいう
ございました。よく読みました。いろ／＼な事がはつきり分りま
した。だん／＼にすべての点が、あなたに一歩づつでも半歩づつ
でも近づいてゆく事を見るのは、私にとつてどんなに嬉しい事で
せう。

大垣のあたりで明けた朝は本当におどり上りたいやうにいい朝
でした。関ヶ原辺には、いい色をした緑の草の中に可愛らしい河
原なでしこが沢山咲いてゐました。私の好きなねむの花も。

かうして離れてゐると堪^{たま}らなくあなたが恋しい。私のすべては
あなたと云ふ対象を離れては、何物をも何事についても考へ得ら
れない。それでゐて非常に静かにしてゐられます。あなたが今何

をしてゐらつしやるかしら、と考へる私の頭の中にどのやうな影像が出来ても、私の心はおちついてゐます。本当に平らに和やわらいでゐます。私はこの静かな心持があなたと一緒にゐる時にどうして保つてゐられないのだらうと思ひます。

あなたに何時か話しましたね、私が何時でも私たちの交渉がうるさくなつて来ると関係を断ちたいと思ふつて。でも、それが断つても断てなくても同じだと云ふ事も云ひましたね。本当にかうしてゐればそれが出来るやうにも思ひます。けれども、私にはどんなに静かな平らかな気持であらうとも、これが単純なフレンドシツプだとは思へませんわ。肉の関係を断つ事だけで総べてのことを單純に考へられるやうに思ふのは間違ひだと云ふ氣がします。

自分の内に眠つてゐた思ひもよらぬ謬見を、一つ／＼あなたの暗示を受けては探し出してゆくことの出来るのを見ては、私はあなたに何を感謝していいか知りません。いろ／＼な点で私はただあなたの深い、そして強い力に向つて驚異の眼を見はつて居ります。どのやうな事であらうとも、私は今、あなたのそばを離れる事がどんなにいけない事だかが、本当によく分ります。

神近さんはどうしてゐらつしやいますか。本当に私はあの方に
はお気の毒な気がします。私は毎日々々電話がかかつて来る度び
に、辛らくて仕方ありませんでした。私がどんなに彼あの方の自
由を害してゐるかを考へると、本当にいやでした。そして又、あ
なたのいろ／＼な心遣ひがどんなに私に苦しかったでせう。私は

かなしいやうな妙な気がして仕方がなかつたのです。今度も帰へりましたら、直ぐに家を探しておちつきたいと思つてゐます。

お仕事は進みますか、心配してゐます。本当によく邪魔をしましたね、おゆるし下さいまし。

「『大杉栄全集』第四卷、大杉栄全集刊行会、一九二六年九月」

青空文庫情報

底本：「定本 伊藤野枝全集 第二卷 評論・随筆・書簡」——
『青鞜』の時代」學藝書林

2000（平成12）年5月31日初版発行

底本の親本：「大杉栄全集 第四卷」大杉栄全集刊行会

1926（大正15）年9月8日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：酒井裕二

校正：雪森

2016年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

書簡 大杉栄宛

(一九一六年七月一五日 一信)

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 伊藤野枝
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>